追加配布資料

いせきんぐ宗像シンポジウム 2014

資料集

邪馬台国とムナカタ国

―「ムナカタ国」はあったか―

プログラム

13:00~13:05 ● 開催挨拶

13:05~13:20 ● 調査報告

「田熊石畑遺跡の調査報告」

白木 英敏（宗像市郷土文化交流課）

13:20~14:00 ● 特別講演

「邪馬台国を再考する」

大塚 初重（明治大学名誉教授）

14:00~14:40 ● 基調講演

「青銅器を帯びたムナカタの弥生人」

吉田 広（愛媛大学ミュージアム准教授）

休憩（10分）（質問票回収）

14:50~15:30 ● 基調講演

「邪馬台国九州説とムナカタ国」

高島 忠平（旭学園理事長）

小休憩（5分）（質問票回収）

15:35~16:25 ● パネルディスカッション 質疑応答

コーディネーター：板橋 旺爾（西南学院大学非常勤講師）

パネリスト：高島 忠平／吉田 広／西谷 正（海の道むなかた館長）

16:25~16:30 ● 閉会挨拶

日時 9/7(日) 13:00~16:30

会場 宗像ユリックス ハーモニーホール

主催：宗像市教育委員会　　協力：田熊石畑遺跡村づくりの会

シンポジウムの目的

田熊石畑遺跡の発見により、これまで、あまり注目されることのなかった宗像の弥生時代像がいま、大きく変わりつつあります。平成 20 年、この遺跡のわずか 6 基の木棺墓から 15 点におよぶ武器形青銅器が出土し、北部九州屈指の有力者集団の存在が確認されました。そのことにより、弥生時代中期前半（紀元前 2 世紀頃）に成立したムナカタの有力者集団は、およそ 400 年後の弥生時代後期には国と呼べる勢力にまで発展することができたのではないか、と考えることが可能になってきました。ならば、そろそろ宗像市も邪馬台国論争に参入し、存在感を示しても良いのではないでしょうか。

そこで、文化庁の補助金を受け、田熊石畑遺跡歴史公園（愛称：いせきんぐ宗像）のオープンに先駆けた PR 事業の一環として本シンポジウムを開催する運びとなりました。

多彩な弥生文化が花開いた列島各地域から研究の最先端を走る考古学者をお招きし、講演やパネルディスカッションを通じて最新の邪馬台国像を描きだすとともに、「魏志倭人伝」には直接に名の見えないムナカタ国の存在した可能性を探っていきます。

特別講演

「邪馬台国を再考する」

大塚 初重（明治大学名誉教授）

日本の考古学・古代史研究上、古くから話題に登場するのが邪馬台国論である。中国の歴史書『三国志』の中の「魏書東夷伝倭人条」に、邪馬台国の名が登場し、倭の女王卑弥呼が都としている場所が邪馬台国だと記している。この卑弥呼が魏の景初 3 年（239）に遣使し、皇帝から「親魏倭王」の金印や錦、銅鏡百枚、真珠、鉛丹などを賜わり、翌年の正始元年（240）には魏の使節が来朝したことを記している。記録はすべて中国側の記述なのであるが、日中外交の具体的な年号は信頼すべきものに思う。しかし、魏志倭人伝記述の倭国の世情や風俗などすべてが正確な記述なのかどうかは検討すべき点があると思われる。

さらに難しい問題は邪馬台国の所在地についてである。魏志倭人伝に記載されている「郡（帯方郡）より倭に至る」旅程の解釈の仕方によって、邪馬台国の位置論に大きな変化が生じることは一般的によく知られていることである。邪馬台国論といえば九州説と畿内説とがあり、ほかに岡山・島根・四国・愛知・千葉・甲信越・岩手など全国各地が候補地となっている。

しかし、考古学上の調査・研究は進行しており、とくにその年代観の進展は弥生時代と古墳時代の捉え方に変化を及ぼしており、列島内の考古学状況の理解に新しい視点が生まれつつある。大阪府池上曽根遺跡における年輪年代学上の弥生時代中期後半代の年代が、従前よりも約 50 年から 100 年ほど古くなることが認められた。従って、弥生時代後期の所属年代は紀元1−2世紀代となり、前方後円墳が出現する年代は 3 世紀中頃と考えるようになってきた。

「魏志倭人伝」の記述の中には正始 8 年（247）の魏側の動静と倭国への使者到来のことがあり、卑弥呼の死と造墓のことなどが記してある。一般的にはこの正始 8 年（247）には卑弥呼がなくなったと理解されている。年代論から考えれば3世紀の後半頃の大型古墳となれば、奈良県桜井市の箸墓古墳（280m）が例証となる可能性があろう。

青銅器の列島内の分布状態も邪馬台国研究では重要な視点となる。青銅器や鉄器の存在形態から北部九州の優位性が古くから論じられてきたが、卑弥呼登場の 2 世紀後半代の列島内の青銅器分布状態も注目されてよい。

2007 年（平成 19）10 月、東日本の長野県中野市柳沢遺跡で千曲川の堤防整備工事中に、銅戈 7 本と銅鐸片 5 個分が発見された。弥生時代中期後半での青銅祭器発見の東限例であった。近畿地方と北九州で執行されていた青銅器祭祀と同様の祭祀が、遠く離れた信濃国においても執行されていたことを推測させ、列島内の各地で共通したムラの祀りが実行されていたのであり、同じ社会体制、思想体系が維持されていたと思う。弥生時代中期段階の北部九州・瀬戸内・山陰・北陸・近畿地方で同パターンの祭祀が行なわれていたということになる。180 年代から 240 年代頃の卑弥呼の時代には、日本列島では広汎な地域で青銅器を用いた祀りが行なわれていた。卑弥呼共立以前において、紀元前 2 世紀か1世紀に、九州や近畿の祭祀形態は東日本の長野にまで及んでいた可能性が高いと思われる。

福岡県宗像市の田熊石畑遺跡は北九州における武器形青銅器を所有する弥生時代中期前半期の墓域を伴う環濠集落である。弥生時代中期初頭から中頃にかけての有力者の集団墓として、佐賀県宇木汲田、吉野ヶ里北墳丘墓、福岡県吉武高木・吉武樋渡・吉武大石・柚比本村などの諸遺跡を知っていたが、それらの多くは甕棺墓制であった。しかし、田熊石畑遺跡は甕棺墓ではなく、土坑・木棺・石棺墓などであり、北九州にあっても宗像地方の特性が墓制にあらわれているように思われる。

私がとくに注目したいのは調査関係者である白木英敏氏が指摘している事実である。

北部九州型の青銅器副葬を採用しつつ、墓制としての甕棺を受け入れず、土坑・木棺・石棺墓制を採用している独自性を有することである。また、弥生時代前期中頃から中期初頭に見られる土笛（陶塤）の分布を問題として、福岡・山口・島根・兵庫・京都府など日本海沿岸の諸地域が対馬暖流で結ばれた特別な歴史的関係にあると示唆されている点は、きわめて重要な指摘であると思う。

近年、山口県以東の日本海沿岸の弥生時代の遺跡が示す考古学上の問題は多岐にわたる。島根県の青銅器の中でも九州産の青銅器が運ばれており、日本海沿岸の弥生文化の東漸に無関係だったとは思えない。とくに出雲地方との関係が濃いことが注目される。

「邪馬台国とムナカタ国」のテーマに対し、九州説・畿内説との判断を下す前に、2 世紀後半から 3 世紀後半の倭国の現状は、さらに前段階の 1 世紀から 2 世紀の列島内の考古学状況を把握すると、北九州と瀬戸内地方から東方の広汎な地域との交流がさかんであったことを知る。そうした列島内で倭国の動乱をどのように受けとめるべきか。その地域が想起できるとすれば、何処の地方に求められるのか。

最近、東海地方から東京湾沿岸地域をも邪馬台国の領域だと理解する東日本の研究者は多い。列島内の弥生時代中期後半から後期段階における人とモノのダイナミックな移動・交流状況も、邪馬台国が何処にあったのかを推測する重要な手がかりになるのではないだろうか。列島内全域の弥生時代中期から後期段階の歴史的な状況を考えると、邪馬台国の歴史の歯車は瀬戸内東部・四国と大阪湾沿岸地域と、さらに山陰・北陸など日本海沿岸地域を含めた広汎な地方の動きの中から動き出した可能性が濃いのではないかと思っている。

大塚 初重（おおつか はつしげ）

1926 年東京都生まれ。明治大学名誉教授、文学博士。非営利活動法人「生涯学習応援団ちば」理事長。

1957 年明治大学大学院文学研究科博士課程修了。明治大学教授を務める傍ら日本考古学協会会長、山梨県立考古博物館長、山梨県埋蔵文化財センター所長などを歴任。

近著に『土の中に日本があった』（講談社現代新書）、『邪馬台国をとらえなおす』（講談社現代新書）、『考古学最新講義シリーズ－古墳と被葬者の謎に迫る』（祥伝社）、『考古学最新講義シリーズ－装飾古墳の世界をさぐる』（祥伝社）など。

基調講演

「青銅器を帯びたムナカタの弥生人」

吉田 広（愛媛大学ミュージアム准教授）

田熊石畑遺跡では、特定の墓域を形成した木棺墓群から多くの武器形青銅器が出土した。いずれも被葬者の脇に添えられた副葬品であり、これだけの青銅器を帯びた（佩いた）ムナカタの弥生人は、どのような役割を担っていたのだろうか。

甕棺と異なり時期の断定は難しいが、40 cm前後の中細形B類銅剣をもつことから、田熊石畑遺跡の木棺墓群は弥生時代中期前葉頃に位置づけられる。青銅器が登場し福岡市早良地域への集中が際立つ中期初頭の次段階にあたるが、中期前葉頃に降ると、西で唐津市宇木汲田遺跡、南は鳥栖市柚比本村遺跡あるいは吉野ヶ里町吉野ヶ里遺跡北墳丘墓と、まとまった青銅器を保有する墳墓群が現れる。田熊石畑遺跡もこれらと軌を一にし、東への武器形青銅器分布拡大を担った格好である。

ただし、その武器形青銅器の東方展開に際して、ムナカタとその周辺では、幾つか特徴的な状況がみられる。

まず、遠賀川流域から東では銅剣に関部双孔が現れ、銅剣の扱い方が変容する。銅剣を長柄の先に槍先のように装着して高く掲げ、関部双孔には吹き流しの飾りをなびかせたらしい。この用法は中四国地方以東へと広がるが、田熊石畑遺跡の木棺墓群はこれらと異なり、身に帯び副葬する銅剣がまとまった最東例ということになる。中でも瀬戸内地域で卓越し専ら埋納される中細形B類銅剣を含み、これもやはり身に帯び副葬しており、甕棺墓や武器形青銅器副葬が顕著なムナカタより西側の弥生社会との共通性を示す。なお、中細形B類銅剣の副葬は、柚比本村遺跡と吉野ヶ里遺跡北墳丘墓にもみられる。

そのような中にあって、ムナカタとその周辺の独自性の主張を、武器形青銅器副葬における銅戈の扱いに窺うことができる。田熊石畑遺跡では銅剣・銅矛が鋒を足下に向け両脇に添えられるのに対し、銅戈は頭部横向き（2・4号墓）あるいは頭部に最も近接（1号墓）して副葬されている。宗像市朝町竹重遺跡でも、破片銅矛とともに完形銅戈が頭部付近から出土し、遡って中期初頭の古賀市馬渡・束ヶ浦遺跡甕棺墓も銅戈を被葬者頭部に最も近接して副葬する。武器形3種の中でも副葬に際して銅戈を重視する傾向が、ムナカタとその周辺には読み取ることができ、田熊石畑遺跡にそのもっとも顕著な様相がみられるのである。量的に稀少な銅矛に価値を見いだしていくムナカタより西側の弥生社会と異なる銅戈の選択は、北部九州でも東に偏った銅戈の石製模倣卓越とも相関する。

ムナカタの弥生人は、甕棺墓こそ採用しなかったものの、北部九州圏の中に自らを位置づけ、青銅器文化の東方展開においてより東方の地域との関係・門戸として枢要なる役割を果たしながら、銅戈重視・模倣という地域的独自性を発揮させた青銅器文化の中核的存在でもあったのである。後に海上交通の担い手としてさらに重要な役割を果たすことになるムナカタ海人の原形を、弥生時代中期に遡った対東方関係の中に求めることができよう。

吉田 広（よしだ ひろし）

1967年生愛媛県まれ。愛媛大学ミュージアム准教授。
1994年京都大学大学院文学研究科博士後期課程中途退学。京都大学文学部助手を経て1996年愛媛大学法文学部講師、2002年同助教授、2009年同ミュージアム准教授。著書に（共著）『出雲荒神谷遺跡　第一冊本文編』島根県教育委員会・島根県古代文化センター、『弥生時代の武器形青銅器　考古学資料集21』国立歴史民俗博物館、（共著）『中野市柳沢遺跡』長野県埋文センター、「弥生青銅器祭祀の展開と特質」『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集、『3Dレプリカを用いた弥生時代武器形青銅器のライフサイクルに関する復元実験研究』など。

基調講演

「邪馬台国九州説とムナカタ国」

高島 忠平（旭学園理事長）

邪馬台国は、日本列島における古代国家生成の謎を解く歴史上の極めて重要な課題、また、邪馬台国の時代は、弥生時代史の結末であり、古代国家成立過程の序章でもある。

*当時の「国」の領域は、律令期および現在の郡にほぼ対応する。

*現在の北海道・東北・沖縄を除く地域に、弥生時代の環濠集落が分布、これらの地域に、倭人が生息、数百の「国」がある。北部九州には約四十国が存在する。

*これらの「国々」は、中国の各時代の歴史書、前漢書・後漢書・三国志・晋書などの記述から、その生成、発展、連合、地域国家形成といった政治的成長過程を窺うことができる。それと列島社会の弥生時代における考古学上の時代変化と対応することによって、より具体的に理解できる。

*弥生時代中期以降の北部九州は、環壕集落の拡充、首長墓の顕在化・列状埋葬など造墓規制の強化、武器の祭器化、戦死・戦傷者埋葬例の増加、銅鏡・鉄製武器など中国系文物の増加がある。これは、この時期に北部九州各地に、草分け一族（氏族）を頂点にした階層化が進み、氏族が政治的に結合、首長制による「国」を生成、東アジアの宗主国中国との政治的関係を取り結んでいったことを示している（前漢書地理志）。

*こうした中で北部九州沿海部の海人集団（ムナカタを含む）は、主導的役割を果たした。

*弥生時代後期には、「国」の都となる集落規模が機能を拡充すると共に、各海人集団（「国」）は、海外外交・交易にあたって政治的に連合し、「漢倭奴国王」を共立するまでに倭人集団として政治的成長を遂げた。―ムナカタの「国」もその一翼―

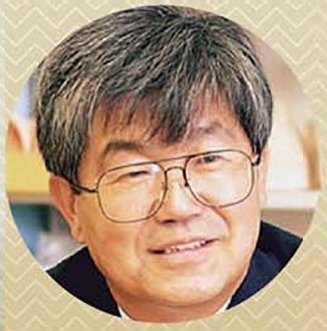
*弥生時代後期以降、後漢系文物（銅鏡・鉄製武器など）の北部九州各地への広がりからみて、「国」連合はより拡大した。生口百六十人を伴った「倭国王師升等」の朝貢がそれである。

*さらに、鉄製品は、列島各地に普及、弥生社会は鉄の時代となった。特に中・南九州そして山陰地域に普及が著しい。鉄を中心とした流通システムが九州を中心にして成立した。こうした中で、北部九州の邪馬台国を中心とした倭人集団とは別に、狗奴国男王卑弥弓呼による「国」連合勢力が倭人社会に台頭、外交・交易において倭人社会の主導権を争う情況となった。

*「素より和せず、相争う」二つの倭人集団の抗争は、弥生時代後期、政治・経済上の戦略的物資となった朝鮮半島『弁辰』からの鉄素材の流通をめぐる主導権争いと同時に、次なる広域的な倭人社会の覇権掌握―地域国家―に向けてのためでもあった。

*「魏志倭人伝」は、倭人はこの二つの勢力とは別に「東海を渡る千余里また国あり、皆倭種なり」とあり、倭人を三つのグループに分けて捉えている。列島各地、九州・近畿のほか中国・山陰・関東などには弥生時代後期の核となる遺跡が多く有り、このことを物語っている。女王卑弥呼の「倭王」権は地域的に限定的で、倭人社会全体に及んでいない。したがって、卑弥呼の都する「邪馬台国」は九州にあったとするのが合理的である。

*ムナカタの「国」は卑弥呼女王連合「国」のひとつと私は考える。



高島 忠平（たかしま ちゅうへい）

1939年福岡県生まれ。学校法人旭学園理事長。

1964年熊本大学法文学部文科東洋史専攻卒業。奈良国立文化財研究所を経て1974年より佐賀県教育委員会勤務、以後佐賀県教育委員会副教育長、佐賀県立名護屋城博物館長、佐賀女子短期大学教授、同短期大学学長を歴任。

著書に『吉野ヶ里と古代遺跡』（学習研究社）、『日本通史　古代1 吉野ヶ里』（岩波書店）、『環濠集落吉野ヶ里遺跡とクニの成立』（吉川弘文館）など。

「ムナカタ国の可能性」

西谷 正（海の道むなかた館長）

田熊石畑遺跡の主な出土遺物

弥生時代中期前半のころ、宗像地域では、細形の銅剣・銅矛・銅戈が墳墓の副葬品として出土する。数個所の出土地の中で、田熊石畑遺跡の墓地では、一個所で15本という多量の青銅器が出土した。そのように青銅器を集中的に保有した被葬者は、宗像地域に形成されていた農業共同体の首長層であったと推測する。

弥生時代も中期後半に入ると、たとえば糸島市の三雲南小路遺跡などで見るように、大形甕棺墓の副葬品に前漢鏡が多量に副葬される。このような状況は、唐津市の桜馬場遺跡の甕棺墓における後漢鏡の副葬で知られるとおり、後期へと続く。そのような墳墓における銅鏡のみならず、素環頭大刀・ガラス璧などの副葬や、遺跡からの金印・貨幣などの出土と、『漢書』地理志や『後漢書』倭伝の記事から推して、それらの中国・漢の文物は、朝鮮半島の北西部に設置されていた楽浪郡からもたらされたと考えられる。そして、その背景に、各地の農業共同体が楽浪郡を通じて漢帝国と外交関係を結んだことを契機に、農業共同体が国に、また、その首長が王に成長、発展したと考える。このような社会状況は後期へと続く。宗像地域では、今のところ国や王の登場を考古資料から想定することは困難である。

弥生時代後期後半という時期は、一方では『魏志』倭人伝に記されるように、日本列島各地に邪馬台国をはじめとする国々が存在していた。宗像地域では、徳重高田遺跡などで、後漢鏡の破鏡が出土しているので、後漢鏡を保有する有力者がいたといえる。

古墳時代に入ると、『魏志』倭人伝に登場する国は、ヤマト王権によって縣（あがた）という地域単位として編入される。旧宗像郡域の東隣りは遠賀郡であるが、そこには、岡（おかの）縣（あがた）が存在したようである。このことは、『日本書紀』仲哀天皇八年春正月の条に見える筑紫行幸に際し、岡縣主の祖・熊鰐が登場することから推測できる。岡縣の設置を契機として、縣主墓と推定される島津丸山古墳が築かれたと考えられる。

一方、宗像郡域では、島津丸山古墳とほぼ併行期に当たる出現期の築造と考えられる前方後円墳に、徳重本村2号墳がある。そこで、遠賀郡域における島津丸山古墳と岡縣（主）との関係から類推して、宗像郡域においても徳重本村2号墳に対応する胸形もしくはムナカタ縣（主）の想定が可能ではなかろうか。もっといえば、『魏志』倭人伝の時代の北部九州における国々の想定に照らして、宗像郡域にムナカタ国とも呼ぶべき、一つの国の存在の可能性を主張したいのである。そのためにも、田熊石畑遺跡で見る首長墓（区画墓）に続く、弥生時代後期後半における国邑すなわち拠点的中心集落と、王墓に当たる墳丘墓という遺跡の発見が期待されるのである。ちなみに、『魏志』倭人伝時代の国は、古墳時代あるいはヤマト王権時代の縣や、さらに時代は降って律令時代の評・郡（こおり）を経て、現代の郡へと継承されている。

西谷 正（にしたに ただし）

1938年大阪府生まれ。海の道むなかた館長、九州大学名誉教授、九州歴史資料館名誉館長、糸島市立伊都国歴史博物館名誉館長、名誉文学博士。
1966年京都大学大学院文学研究科（考古学専攻）修士課程修了。奈良国立文化財研究所研究員、福岡県教育委員会技師、九州大学助教授を経て、1987年～2002年九州大学教授。著書・編書に『東アジア考古学辞典』（東京堂出版）、『魏志倭人伝の考古学－邪馬台国への道』（学生社）、『古代北東アジアの中の日本』（梓書院）、『伊都国の研究』（学生社）、『邪馬台国をめぐる国々』（雄山閣）、『古代日本と朝鮮半島の交流史』（同成社）など。

「宗像の吉野ヶ里」ー田熊石畑遺跡

板橋 旺爾（西南学院大学非常勤講師）

近年、新聞紙上をにぎわす考古学ニュースは近畿地方からのものが多く、かつて佐賀県・吉野ヶ里遺跡が全国的ブームを呼んで邪馬台国九州説を力づけたあのエネルギーはどこへ行ったのかと思えた。そのような時、私が住む宗像から田熊石畑遺跡の発見が報じられた。「海の正倉院」と呼ばれる沖ノ島に対し、私はこの遺跡を「宗像の吉野ヶ里」と呼ぶことにした。

では、「海の正倉院」と「宗像の吉野ヶ里」をどうつなぐべきか。

これまで宗像では、奴国や伊都国のような多数の青銅器による厚葬墓群がみられなかった。つまり王（オウ）の不在である。よって弥生時代の宗像は周辺群小地域でしかなかったと思われていた。このため、古墳時代になって突然のようにヤマト王権と直結する「海の正倉院」や宗像海人族が中央舞台に躍り出るのが考古学上も文献史学上も謎だった。

だが、田熊石畑遺跡によって「王」ないし王族の存在が明らかになったのである。

JR東郷駅近くに東郷高塚古墳がある。古墳としては宗像で最初の盟主的首長墓だが、被葬者は沖ノ島祭祀開始の時期と合致する。次代にはこれが新原・奴山古墳群へと移り沖ノ島を祀った宗像海人族の隆盛を表すのだが、東郷高塚はいわば古墳時代の宗像政治圏の確立を示す古墳と言える。その東郷高塚のすぐ北西に接して田熊石畑遺跡が位置していることは重要だ。

「海の正倉院」につながる弥生ムナカタの王族たち。さてそこからは、邪馬台国がどの方角に見えていたのであろうか。

板橋 旺爾（いたはし おうじ）

1946年福岡県生まれ。比較文明学会会員、西南学院大学非常勤講師。
1970年明治大学文学部史学科考古学専攻卒業。福岡市教育委員会文化課を経て読売新聞西部本社入社、社会部次長・編集委員を勤める。著書に『奴国発掘』（学生社）、『列島考古学の再構築ー旧石器から弥生までの実像』（学生社）、『大王家の柩ー継体と推古をつなぐ謎』（海鳥社）など。

いせきんぐ宗像（田熊石畑遺跡歴史公園）
整備イメージ図

「いせきんぐ宗像」について

宗像市郷土文化交流課

「いせきんぐ宗像」とは、市民参加によって弥生ムラをつくり、そだて、活用する屋外の歴史拠点施設の愛称です。平成 24 年度から 26 年度にかけての 3 ヵ年で管理棟やトイレ、園路など基盤的な整備を終えますが、その後も花園運営や古代の遺構復元、多様な市民活動の場として、また緑の空閑を楽しむ憩いの場として 10 年、20 年と村づくりを進めていく、大変息の長い整備計画が特徴です。なお、平成 27 年 7 月頃に全面オープンする予定です。

追加配布資料

倭人は帯方東南の大海の中にあり。山島に依りて国邑をなす。旧百余国。漢の時に朝見する者あり。今使訳通ずる所三十国なり。

郡（帯方郡）より倭に至るには、海岸に循いて水行し、韓国を歴て、乍は（たちまち・しばらく）南し、乍は東して、其の北岸、狗邪韓国に到る。七千余里なり。

始めて一海を度ること千余里、対馬国に至る。其の大官を卑狗といい、副を卑奴母離という。居する所絶島にして、方四百余里ばかり。土地山険しくして深林多く、道路は禽鹿の径の如し。千余戸あり、良田無く、海物を食して自活し船に乗りて南北に市糴す。

又、南一海を渡ること千余里。名づけて瀚海という。一大（支）国に至る。官をまた卑狗といい、副を卑奴母離という。方三百里ばかり。竹木叢林多く、三千ばかりの家あり。やや田地ありて、田を耕せども、なお食は足らず。また南北に市糴す。

又、一海を渡ること千余里。末盧国に至る。四千余戸あり。山海に浜いて居す。草木茂盛し、行くに前人を見ず。好んで魚鰒を捕らえ、水深浅となく、皆沈没してこれを取る。

東南へ陸行すること五百里。伊都国に到る。官を爾支といい、副を泄謨觚柄渠觚という。千余戸あり。世々王ありて、皆女王国に統属す。郡使の往来、常に駐る所なり。

東南、奴国に至るには百里。官を兜馬觚といい、副を卑奴母離という。住居は二万余戸あり。

東行、不弥国に至るには百里。官を多模といい、副を卑奴母離という。千余家あり。

南、投馬国に至るには水行二十日、官を弥弥といい、副を弥弥那利という。五万余戸ばかりあり。

南、邪馬台国に至る。女王の都する所なり。水行十日、陸行一月なり。官に伊支馬あり、次を弥馬升といい、次を弥馬獲支といい、次を奴佳鞮という。七万余戸ばかりあり。

女王国より以北はその戸数道里を略載し得べくも、その余の旁国は遠絶にして詳らかにすることを得べからず。

次に斯馬国あり、次に已百支国あり、次に伊邪国あり、次に郡支国あり、次に弥奴国あり、次に好古都国あり、次に不呼国あり、次に姐奴国あり、次に対蘇国あり、蘇奴国あり、次に呼邑国あり、次に華奴蘇奴国あり、次に鬼国あり、次に為吾国あり、次に鬼奴国あり、次に邪馬国あり、次に躬臣国あり、次に巴利国あり、次に支惟国あり、次に烏奴国あり、次に奴国あり。これ女王の境界の尽きる所なり。

其の南に狗奴国あり、男子を王となす。其の官に狗古智卑狗あり。女王に属さず。郡より女王国に至るには万二千里なり。

邪馬台国への道のり <「魏志倭人伝」（一部）読下し例>

平成26年度　文化庁国庫補助事業

いせきんぐ宗像シンポジウム2014資料集

邪馬台国とムナカタ国

平成26年9月7日

宗像ユリックス　ハーモニーホール

主催　宗像市教育委員会
協力　田熊石畑遺跡村づくりの会